

平成から令和へ変わるに際して

まもなく平成から令和に変わる。ちなみに私の Mac はまだ令和の変換は一発ではできない。まだ慣れていないのだ。

平成は 1989 年 1 月 8 日から始まった。その前年の秋に、私は京都大学での 2 年半のオーバードクター生活を終え、広島大学へ講師として赴任した。広島大学で約 20 年間、講師、助教授、教授とそれなりに順調な学者としての経歴を歩み、最後は 21 世紀 COE プログラムの研究代表者も務めた。広島大学に特に不満があったわけではない。しかし、学者として別の「場」で自分を試してみたいと思った。50 歳を迎えた 12 年前、箱根の関を超えて都の西北・早稲田大学へ籍を移した。

思い返せば、大学教員になり自律した学者として人生を重ねてきた 30 年は、平成の 30 年 4 ヶ月よりわずかに 3 ヶ月ほど長いだけで、ほぼほぼ平成の時代であった。平成という時代に特別な思いがあるわけではないが、この 30 年間の学者としての仕事や生活には、当然ながら様々な思いがある。

特に、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と福島原発事故は、私の学者としての考え方やあり方を大きく変えた。スリランカの世界遺産都市・キャンディ市のホテルのテレビで観た BBC 国際放送の 1F1 号機の爆発映像は衝撃だった。その時の思いは、拙著『フクシマ原発の失敗』早稲田大学出版、2012 年に詳しく書いている。

福島原発の失敗は日本の科学技術だけでなく日本の大学の失敗でもあった。福島原発事故は、日本の多くの学者・大学人に、日本の学術研究体制や大学の教育研究のあり方を根底から問い直さないといけないとの想いを強く抱かせた。「福島の再生なくして日本の再生なし」（2012 年 7 月 13 日閣議決定）は、「福島の再生なくして日本の大学の再生なし」でもあった。

福島原発事故から 8 年がたった今、日本の大学の多くは真摯な反省や改革をすることもなく、権力と癒着し、天下り人事を唯々諾々と受入れ、外部資金の獲得に汲々としている。大学教員の多くは「サラリーマン化」し、学者らしい学者は少なくなり、日本の大学は国際化という意味不明なスローガンの下で、急速に多様性を喪失しつつある。

自分に出来ることを最大限するしかないのだと思う。2017 年 5 月に早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターを、東大や京大の学者の仲間たちや福島の人たちと創った。今年 1 月末の第 3 回ふくしま学（楽）会で、ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）を提案した。1F 保存・活用を中核とした事故遺産・産業遺産ネットワークの構築、1F を核とした地域アートの展開、復興体験などの農泊・渚泊を構造化した広域 DMO の創設により、廃炉産業だけに頼らない福島県浜通り地域の自律した将来像を提唱した。

連休前、SI 構想を具体化すべく、地域資産としての 1F の利活用を考える準備会議を行った。本会議候補者の提案の仕方など、大学や学者としての詰めの甘さを厳しく批判され、準備会議はあえなく準備会議の準備会に格下げされた。平成の最後に自らの学者としての脇の甘さを思い知らされた。大学や学会のあり方を批判しながら、大学に長らく籍をおく自らは学者として特別だとも思っているのかと・・・。ただ、福島の出席者から、多くの学者・研究者が単に調査するだけに福島に来て、何も福島に返してこなかったが、SI 構想は、はじめて福島の我々にボールを投げてもらったと考えている、との発言があった。多少救われる気持ちがあった。

脇の甘さを抱えながら、「3.11」の想いを胸に、自分に出来ることを最大限するという志を大切に、令和の時代を学者として生きて行きたいと思う。最後に私の好きな作家・高村薫の以下の言葉で平成を終えたい。

「平成は、阪神淡路大震災や東日本大震災をはじめ未曾有の自然災害が頻発した時代だが、振り返れば、大都市神戸が震災で火の海になっても、あるいは東北沿岸で 1 万 8 千人が津波にのまれても、またあるいは福島第一原発が全電源を失って爆発しても、日本社会の思考停止は基本的に変わることがなかった。

復興の名の下、被災地では大量のコンクリートを投じた巨大堤防の建設が進み、原発は各地でなお動き続け、いつの間にか持続可能な新しい生き方へ踏み出す意思も機会も見失って、私たちはいまに至っている。

(中略)

平成が終わって令和が始まるいま、何よりも変わる意思と力をもった新しい日本人が求められる。どんな困難が伴おうとも、役目を終えたシステムと組織をここで順次退場させなければ、この国に新しい芽は吹かない。常識を打ち破る者、理想を追い求める者、未知の領域に突き進む者の行く手を阻んではならない。」(高村薫「思考停止、変える力を」『朝日新聞』2019 年 4 月 30 日付け)

令和も引き続きよろしく申し上げます。

2019 年 4 月 30 日

早稲田大学・早稲田キャンパスの研究室にて

松岡 俊二